

アサの見た浦河大火 一町の八割を焼いた大火事

明治四十一年二月四日、浜町に住む大工倉形新治の仕事場（現“奴”左隣り）から出た火は、市街の八割を焼き尽くし、現在までの浦河に於ける最大の火災となった。しかし火災発生時間、焼失件数など資料間の食い違い、加えて被災範囲も詳しいことは残されていないため、正確な状況はつかめていない。また実際に火災を体験した者もすでに大半が故人となっており、当時を振り返ることは非常に困難となっている。こうした中で、次に示す高木アサらの記憶は貴重な手掛りとなるものである。

「校長先生、火事です！」担任の辻三平（さへい）先生が高木アサ（旧姓藤田）ら高等科女子組の教室に飛び込んで来たのは、お昼前、十一時か十一時半頃だったという。当時の高等科は四年制で、浦河尋常小学校に併設されており、人数が少ないため一年から四年までが男女別のークラスずつであった。ちなみにその頃は尋常科も四年までで、ちょうどそれが六年制に移行する年であったという。火災発生の知らせがはいったのは、体操の時間が変更になって、梶川勝三郎校長が何か話をされていたときだった。

しばらくはそのまま授業が続けられたが、やがて詳しい情報が入って来ると授業は中止され、尋常科の三年生までは、教師引率のもとに山寺（光照寺）へ避難することになった。それ以上の学年の者はそのまま教室に残されたが、火元に近い泉 ミツらは帰宅させられた。“いったいどの辺まで火の手がまわっているのだろう”残された者たちは気が気ではない。担任から火事の様子を見に行っても良いという許しをもらって、高木アサは近所に住む一級上の野々村キミと、山添いに灯台の下あたりまで行ってみた。

町は真っ赤に燃えている。ちょうど落成間近だった「日高開発記念館」がガタンガタンと不気味な音をたてて燃え落ちていた。「みんな働きに行ってるから、家にはばあちゃんが一人なんだ」野々村キミがそう言い出し、急に不安になった二人は、内履のぞうりのまま家（五丁目）へ向かって雪道を走った。

帰宅すると近所の者たちは皆外へ出て、「ひどい火事だけど、まさかここまで来ることはないだろう」と見物を決め込んでいた。アサの家では、父が同郷で懇意にしていた、火元近くの高木金物店へ手伝いに駆けつけて留守だった。だが何事につけ用意周到な母は、二人の娘（アサの姉）に手伝わせて紐を掛けたり、一反風呂敷を広げたりして荷造りをしていた。

五丁目で馬宿と菓子屋を営んでいた親戚の藤原常次の家では、娘夫婦が夫留吉の実家である浜町の万田家へ駆けつけていた。万田の家は今のえびす湯のあたりにあって、火元とは目と鼻の先である。いつ風向きが変わって火の手が来るかと思うと、一人暮らしの母親は生きたこちがしない。息子たちは自分の家も気になるのだが、母親の心細さをおもくと身動きがとれずにいた。

かたや藤原の家では、馬が焼けては大変だと、常治は馬を引いて乳呑（ちのみ）（現東町）へ行ってしまおうし、娘たちはいないし、常治の妻は一人でオロオロするばかりである。取りあえず、カンに入った菓子を家の外に運び出すと、強風に吹き飛ばされて中の菓子はバラバラに散らばってしまう。「ああもったいない。ねえひろって行きなさいよ」と通りかかった炭焼きのおばさんに声をかけると、「こ

んなときに、お菓子どこでないべさ！」と叱られてしまった。生菓子は田口商店の裏にあった松月旅館に預けたのだが、これもお昼どきということもあって、火事のどさくさに旅館の客に食べられてしまった。娘たちが灯台の上をまわってようやく家へ駆けつけたときには、火はもう手を付けられない状態で、裏の物置に入っていた菓子の材料などもすべて燃えてしまった。

また大通三丁目の北川商店では、何とか蔵だけでも守ろうと、店の者が土蔵の窓枠に味噌をぬりつけていたし、五丁目の金森菓子店では、火の手が来ないように、まじないの腰巻きを旗にして立て掛けていた。

塚田三之助は、家の若い衆六人を連れ、檀家である正信寺へ走った。しかし国道はすでに火の海、日高開発記念館も火に包まれていた。建物の前では、西支庁長が腕組みをして座りこみ、じっと火を見つめている。「俺の生涯の苦労も、これで灰になるのか」と、無念げにつぶやくのが聞こえた。彼を火のそばから連れ出し、警察横の道を登って、正信寺の鐘つき堂のところからやっと寺へ辿り着いた。火はすぐそこまできている。氷の張ったウロコベツ川に穴をあけ、水を汲んで掛けたり、飛び火した火をたたき消したりして、寺はなんとか類焼をまぬがれることができたという。

しかし強い西風と凍結による水不足、“竜吐水”とは名ばかりの手押ポンプ（腕用郷筒乙一号）一台では、消防組の消火作業はままならなかった。軒を連ねた桁屋根は次々に燃え落ちていく。ここまで来ないだろうとタカをくくっていた五丁目にも、やがて火の手がまわった。近所の者たちがあわてだした頃、すでにアサの家では荷物はあらかじめ整理され運び出すばかりになっていた。その荷物は近所の人たちといっしょに、道をへだてた向かいの芝居小屋（長盛座）の沢に運び入れた。あれほど早くから荷物をまとめ、残らず運び出したつもりでも、後になってみれば足りない物がたくさんあったというから、土壇場であわてて逃げ出した人たちはいかばかりだったか。

夕方になって、アサたちは大事な物だけ持って、以前入植の頃に住んでいた乳呑の家へ避難したが、行き場のない者たちは芝居小屋に住みつき、役場の炊き出しを受けたということである。

浜側を焼き尽した火は、やがて国道をはさんで山側へと移り、火元から東は、一部低地を除いて金森商店（大通五丁目、現仙道商店）あたりまで、道に沿って二百二棟、二百五戸を消失。被害総額は二十六万円に及んだ（「浦河町消防百年の歩み」）。なおこの大火により、支庁、警察署、支庁官舎も焼失、それぞれ堺 忠助宅、区裁判所書記局、裁判所空室に一時移転された。支庁長一家は田中仙次郎別家へ移った（「西 忠義翁徳行録」）。

高木アサによれば、このときまで大火らしい大火のなかった浦河では、これを機に、火事といえど何をおいても避難するのが習慣となったという。そしてこの習慣は、その後明治四十五年、大正十三年、昭和十八年と続いた浦河の大火のときに、悲しい哉十分役立ったのである。

[文責 河村]

【話者】

高木 アサ	浦河町堺町西	明治二十七年生まれ
遠藤 一郎	浦河町東町ちのみ	明治三十二年生まれ（平成三年十月没）
塚田 正吉	浦河町大通二丁目	明治四十年生まれ
浜崎 サダ	浦河町昌平町	明治三十二年生まれ

【参考】

浦河町消防百年の歩み 昭和六十一年 浦河消防署
西 忠義翁徳行録 昭和八年 日高実業教会